

Title	<文化・表現・多様性と日本社会>「価値」とは何か?: 特色というボーダー ガーデンルームス ポール・スミザー氏
Author(s)	スミザー, ポール
Citation	公共空間 : 政策の現場から最前線を伝える情報誌 (2015), 2015 Spring + Autumn (Vol. 14): 1-5
Issue Date	2015
URL	http://hdl.handle.net/2433/216815
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

「価値」とは何か？ 特色というボーダー

ガーデンルームス ポール・スミザー氏

桜が咲く京都を離れ、雪がところどころに残る山梨県北杜市に入る。JR長坂駅を降りてタクシーで一〇分ほどの場所にある事務所は、昔ながらの日本らしい建物である。八ヶ岳南麓の勾配がある棚田の見られる風景に溶け込んでいる。この場所ですくスクープデザイナーとして活動するイギリス人、ポール・スミザー氏が迎え入れてくれた。



中央本線 長坂駅にて

築一四〇年・固定資産税一〇八三円

事務所の中は大きな梁、一本の木でできた柱、土塗りの壁、今の一般的に普及している住宅とは大きく異なる、歴史を感じる佇まいだ。しかしこの家屋にかけられた固定資産税はわずか一〇八三円。家屋の状態を維持することが景観全体の向上に大きく貢献している現実からは、あまりにかけ離れた評価ではないだろうか。

「こんな家になくてもならないなんてかわいそうと思われるようなもんだよ」。スミザー氏は言う。「ここに来る間にたくさんの建物があつたと思うし、中には景観にとけ込まずに、浮いてしまっている建物もいくつか見えたでしょう。私は、庭づくりについても大切にしていることがあるんです。それは周囲の景色にとけ込ませるという事です。とけ込むことが、きれいを実現させている。昔の日本がそうであったように、遠くから材料を運んできて建物を作るような事はイギリスの家屋ではしない。イギリスの景色が美しいのは、その地元の材料を活かしているからなんです。なので、ただ外国の景色を切り取って日本に持ってきてもちっとも美しくない」



事務所で取材に応じるポール・スミザー氏

スミザー氏は、日本でイギリスのコッツウォールドの石を輸入して、コッツウォールド風に作られた家屋を何度も目にしてきたが、それは日本の景観を台無しにしてしまっているという。人目につかない屋上庭園ならまだしも、人目につく場所となると全体としての景観が破壊されてしまう。事務所の近くに風情のある造酒屋を営んでいた日

本家屋と蔵が建っていたが、村に寄付されたために、姿を消してしまったという。行政が低い資産価値をつけるものが放つ価値とは、何だろうか。

憧れと景観破壊の負の連鎖

スミザー氏にたずねる。一体、日本人がそこまで海外の景観に憧れる理由は何だと考えますか。間髪を入れずに、「日本が汚くなってしまっているからです」と切り返される。

「京都が良い例だと思います。アメリカが空爆をしなかった景観は、戦後に大きく変わってしまった。新幹線で到着した時に、『京都はどこだ』ってなりました。どこに行っても同じ景色です」

日本は、海外に比べて景観に関するルールが少なすぎるとスミザー氏は指摘する。イギリスでもルールをなくしてしまい、「個人」に任せてしまえば、その土地がどうなるかはわからない。

「日本の場合、例えば、この事務所を売りに出した場合、価値を左右するのは土地の方になってしまいうでしょうが、イギリスではそれはあり得ない話です。『家』に価値があるかどうかなんです。古い建物に含まれる価値を見いだせれば、その家を取り壊さず、新しくアレンジしていけます。ある日突然横にネオンの建物ができたり、景観を破

壊されたりする事もない。その土地に息づく『古い建物を守るルール』があるからこそ、イギリスでは安心して、家への投資を行います」。個人個人が海外に憧れていく事で起きる景観の中の違和感。ルールが少なく、無秩序に立つ看板で日本の道路には情報がありすぎること。そういった景観が汚れていくことへの積み重ねが、「ああ、きれいな場所に行きたい」という日本人の海外の景観への憧れを強くしてしまっている。そして、より一層、落ち着く景観を求めて、個人で自由に変えられる空間（家）に海外を取り入れてしまう。

行政は、無秩序に広がる景観破壊を歯止めをかけるために何ができるのかを考えなくてはならないだろう。ルール作りはもちろんだが、地震大国における電柱の撤去など、多くの問題を抱えていると、スミザー氏は話す。

いつも最後になってしまう緑・自然

家を建てる時、庭づくりはたいい後回しにされてしまう。庭を作る時間と予算は圧縮され、緑は建物の添え物程度の扱いだ。

日本は、粗野に扱われ、ばらばらになった緑をどうやって少しずつ結び付けていくかを考えていかななくてはならないだろう。街の景観や落ち着き

は、そういった緑をつなげていこうとする作業から生まれていく。

せっかく緑に興味を持っても、ただあこがれた海外の景観を自分の場所に取り入れるだけでは、街の景観との調和に失敗する。あくまで景観を作るときには、その場所に合う合わないという基礎を忘れてはならない。

何が起るかわからない日本の景観

景観規制の少ない日本では、どんなに自分の庭に力を入れても、ある日突然、横の土地に六階建てくらいのビルが建ってしまうかもしれない。

現在、多くの自治体で焦点になっているソーラーパネル。原発の停止状態において、着目されている。しかし、ただ作るだけでいいのだろうか。一例として、雑草対策のために、ソーラーパネルの下には、除草シートを敷き詰めるため、景観との兼ね合いでは問題が残ってしまうと、スミザー氏は指摘する。実際にイギリスでは、ソーラーパネルを設置し、何十年か経過した後設置した業者が梱包し、トラックに積み、リサイクルを行うというところまで取り決めがなされているという。決まりがあると、どうその土地を活かそうか考えるようになる。例えば、ソーラーパネルのある

一帯に、日本原産のタイムであるイブキジャコソウを植え、そこに鶏を放し飼いにしてみる。そうすると草を刈る時間を省ける上に、鶏の卵は美味しくなり、付加価値を生むかもしれない。規制は確かに自由を奪うが、その規制の中でも、人はきつとどうすれば良いかを考えようとする。

最初は父親に勧められた一枚の絵

最初は父親が渡してくれた一枚の絵が日本に興味を持つきっかけだった。イギリスの絵とは全く異なる絵のタツチの葛飾北斎「富嶽三十六景」だった。また、スミザー氏が学生時代を過ごした園芸学校で、数人いた日本出身の友人と学校内で見かけた好きな植物のほとんどが、日本原産のものであった。どうせ行くなら、全く違う土地に足を踏み入れてみたいと感じた。

大量生産時代に入ってから、日本は差異化できない土地が増えた。どの町も、どの商品も金太郎飴みたいになってきた。

作る事も重要だが、古い建物を維持し、次の世代がそれに価値を見いだせるようにメンテナンスをすることがさらに重要だ。日本はこの家のように、維持コストが所有者任せになってしまっているため、高齢化や過疎のため、維持ということが

非常に難しい。景観を守るための第一歩はそういうところにある。

ボーダー―名古屋から塩尻に向かう海外旅行者の増加が意味するもの―

イギリスでは、街の範囲が決まっている。街があつて、農地があつて、森林があつて。街と街の間には、グリーン・ベルトという街を仕切る緑が存在する。

「だからわかるんです。車で走っていると、あつ、今街を出たなつて。だから、最初日本に来たときは、成田から続く街の広さに驚いた。やっぱり、東京ってでかいなあつて、千葉くらいからずっと思っていました。看板も何も見ていなかったから、東京の街の大きさにただただ驚いていたら、そこはもう私の最初のホームステイ先の埼玉県川越でした」

そこが日本とイギリスの大きな違いを感じた瞬間であつたという。看板や大きな工場。ごちゃごちゃした感じ、夜には光り出すネオン。最初はそれが良いか悪いかではなく、異国の地に来たという感覚だった。しかし、多くの海外旅行者が見たいのは、それこそ「富嶽三十六景」だと話す。だから海外の人は、名古屋から塩尻に向かう南木曾のエリアの原

風景に好感を持つのではないかと語る。

「日本の中にも、多くの格差がある。駅の前に行けば、なにかとまっすぐ歩けないが、少し奥に出ていけば、どうやって生活しているのだろうかというくらいに人気がなく、廃屋が目立つ。そういったところに、私が学生時代に好きだった日本の植物が静かに自生しているんです」



「萌木の村」を見つめて

スミザー氏が手掛ける「萌木の村」にて

萌木の村は、北杜市の事務所から車で一五分ほどであった。バブル期に隆盛を極めた清里の地には、車中から感じるどこか不気味な雰囲気があった。すぐにその原因が分かる。バブル期に開発された痕跡として、今もなお洋風のペンションの廃屋やレジャー施設の跡が残っている。それがバブル期の乱開発のもたらした現状だった。その長らく元気を失った清里を元気にするための取り組み。萌芽がそこのように根付いていつているのか。

まだ肌寒い清里。車を降りて、夏には野外バレーが行われるという広場に降りると、萌木の村を経営する船木上次氏と職人の方々が焚火に当たっていた。スミザー氏と共に、まだ見えない庭の緑の姿を思い浮かべて話し出す。

一〇〇万円の価値を持つウイスキーの意味

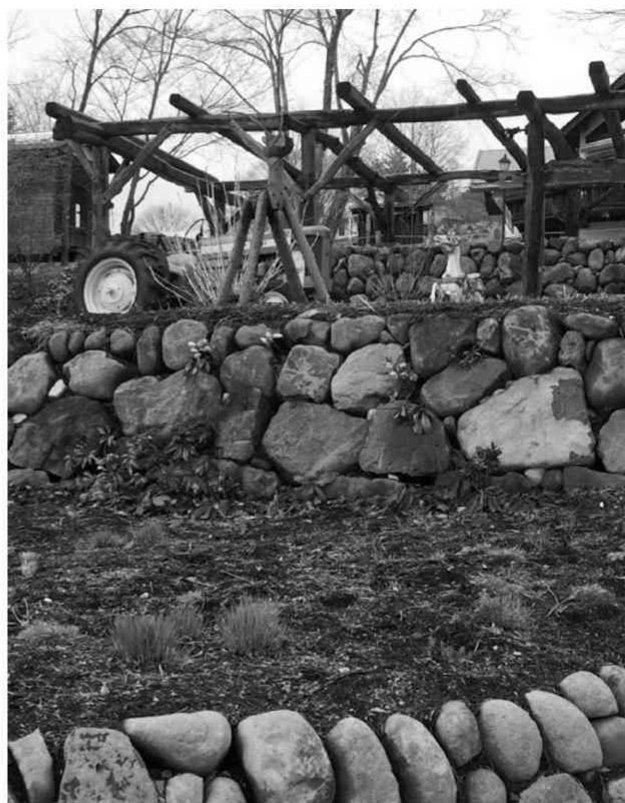
清里の萌木の村で生まれたウイスキー。『フィード・バレエ』。日本で最高ランクの評価を得たウイスキーだ。

船木氏は、「一〇〇万のウイスキーを買う人は、一〇〇万の価値をわかっていて買う。ゴルフの大

会では、一位の賞金は一億円だとすると、二位はその半分くらいの賞金になることがある。たった一打の差かもしれない。しかし、その一打の差に意味がある。人間もそうだ。一人前になってから、少しの差を生み出すことは非常に難しい。一〇〇点という価値の人間がいたとしよう。墮落することは容易でも、そこから一〇一の価値になるのは非常に難しい」と話す。船木氏は続ける。「ポール・スミザー氏と九割同じことを自分が講

演で喋ってもお金は取れない。それは、彼にその価値があるからだ」。価値とは、「大きな」努力によって生まれるたった「小さな」差だと言う。日本では、大概の場合、価値をつけるのは、お金を多く持っている「都会」と言う。だから、清里の地の様な地方は、その価値に追従するために、価値を身につけなくてはならないと話す。そして、その価値を身につけるためには、価値に触れなくてはならない。価値に触れる事で、価値を知ることが出来る。

自らで価値を作り出す。清里萌木の村の息吹を感じ取れる。



庭園の岩も北杜のものが使われている

スミザー氏と船木氏からのメッセージ

スミザー氏から

日本は、おとなしくて、やさしすぎる。メディアのいうことに対しても、政治家に対しても、文面通りに取ることが非常に多い。そういった我慢の結果が、ある意味で景観破壊になっているのかもしれない。

イギリスで最もうるさいのは、小中学校の先生かもしれない。政治家の言う事を鵜呑みにしないように子供たちを教育しているからだ。日本で「立场上」喋れない方は、天皇陛下だけ。日本

人は「立場上」という言葉を口にする事が多い。もっと、自分の思ったこと、考えた事は政治に対して発信するべきだろう。

船木氏から

人生の勝利者は、自分に一番向いていることを、自分に一番適した土地でやった人間の事である。社会的にどうということではない。あくまで自分である。自分に適さないところで頑張ってお金を

作ってもかわいそうなことが多い。日本の若い子が金髪にしている。その髪の下から黒髪が生えてくる彼らは、またそれを金に染めなくてはならない。海外の生まれながらの金髪の人は、そんな手間はかからない。そのメンテナンスにかかるコストは、必死に薬を撒いて海外の庭を作ろうとしている日本にも通じる。それは、「庭（ボンモノ）」ではなく、「ガーデン（模倣）」なのだ。

（取材：四月九日・文責：梨子田太郎）



Paul Smither
ポール・スミザー

ランドスケープデザイナー／ホーティカルチャリスト。

一九七〇年英国生まれ。王立園芸協会ウィズリーガーデン、米国ロングウッドガーデンで園芸学などを学ぶ。一九九七年、三鷹市に「ガーデンルームス」を設立。二〇〇九年、八ヶ岳南麓に拠点を移した。主な作品は、「軽井沢ピクチャレスク・ガーデン」「とっとり晴れやか庭園」「清里・萌木の村」など。姿を消しつつある地域の野草を取り入れた植栽をし、生物多様性の回復にも取り組んでいる。著書多数。

<http://www.gardenrooms.jp/>